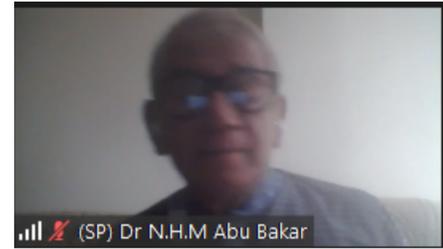




本大会 | 2日目

行動志向のACRP



ACRPは2014年の仁川大会（第8回）での決議に基づき、人身取引防止、いのちの尊厳教育、平和構築と和解、環境問題、そして青年リーダー育成という5つの主となるフラッグシップ・プロジェクトを推し進めてきた。パブリット・ベイバド・ジュニア博士（WCRP/RfPフィリピン）が議長をつとめたこの全体会議では、フラッグシップ・プロジェクトの成果、課題が報告され、大会後の活動に向けての議論がなされた。

アジア太平洋女性信仰者ネットワーク（APWoFN）は、「人身取引防止」プロジェクトを主導してきた。APWoFNの前議長であるリアン・シソン博士は、報告の中で、「人身取引は、多くの人々、特に女性や少女にさまざまなレベルで悪影響を及ぼしている世界的な問題である」と指摘した。女性リーダーたちは、それぞれの国の人身取引の状況について調査を行い、各国委員会は、これらの調査資料を用いて人々の意識を高め、それぞれの地域で現代の奴隷制を緩和するために積極的な行動を起こしている。

ACRPは、バングラデシュで「いのちの尊厳教育」プロジェクトを実施した。WCRP/RfPバングラデシュ事務総長のN.H.M・アブ・バッカー博士は次のように述べた。「ACRPは各国委員会を通じて、児童労働、児童婚、児童の人身取引に反対するアドボカシー活動を行っている。ACRPは、バングラデシュの6つの地区で、疎外されている貧しい家庭の子どもたちに、奨学金、権利教育、活動、その他のプログラムを提供し、教育を通じて希望を与えている」

ACRPは、「平和構築と和解」プロジェクトを実施してきた。WCRP/RfPミャンマー創設メンバーのアル・ハッジ・ウ・エ・ルウィン師は、WCRP/RfPミャンマー、ACRP、WCRP/RfP国際委員会の連携が、国連安全保障理事会やASEAN加盟国の利害関係者との関わりを含め、多層的かつ多宗教的な行動を伴うアドボカシー活動に取り組むための効果的な手段になると強調した。WCRP/RfPミャンマーと国際委員会は、平和と和解のためのWCRP/RfPアドバイザリー・フォーラムを開催し、文民政府、軍、民族武装組織、市民活動家達が集う対話の場を設けて、ミャンマーの多宗教的アイデンティティを育み、さまざまな利害関係者による対話と協力を進めてきた。



「私たちの喫緊の関心事は、パンデミックの抑制です。この懸念は、国、宗教、文化の境界を越えて共有されなければなりません。なぜならウイルスには国境がないからです。私たちの他者への奉仕活動も同様に、国境を越えなければなりません。私たちは皆、同じ船に乗っています。みんなが安全でなければ、誰も安全ではないのです。」

カルロス・レイス師
WCRP/RfPフィリピン

和解に関するもう一つの重要なプロジェクトは、朝鮮半島における韓国宗教人平和会議（KCRP）プロジェクトである。KCRP事務総長のキム・テソン師は報告の中で、朝鮮半島における両国の諸宗教評議会の協力関係は、人と人との対話を橋渡しし、さらには平和と和解に向けた国と国とのハイレベルでの対話に影響を及ぼしていると強調した。

中国宗教者和平委員会（CCRP）は、「環境問題」のフラッグシップ・プロジェクトの実施を主導した。また「砂漠をオアシスに変えるプロジェクト」など、環境保護に対する人々の意識を高め、行動を促すための活動を継続的に行っている。CCRP副会長のスー・シャオホン師は、「CCRPはACRPと協力してビジョンを推進し、宗教間の交流を深め、クリーンで美しい世界にして、それを未来の世代に伝えていきたい」と強調した。

ACRPのもう一つの重要なプロジェクトは、青年リーダーの育成である。アジア太平洋諸宗教青年ネットワーク（APIYN）のモデレーター、レンツ・アルガオ博士は、ACRPの青年リーダー育成の場となっている毎年恒例のユース・キャンプについて紹介し、ACRPの将来を担う献身的で有能なリーダーが育成されることを保証した。

ACRP事務総長の根本信博博士と同東京事務局の吉田達也氏は、ACRPのフラッグシップ・プロジェクトを支援するため、今年の8月1日から10月30日まで、30万円のクラウドファンディングを開始したことを報告した。また、「各国委員会は、各国でのプロジェクト実施のための資金調達に一層の努力をしてほしい」と訴えた。

以上のACRPプロジェクトの評価を踏まえて、ACRP事務総長シニア・アドバイザーの神谷昌道師が東京大会後のフラッグシップ・プロジェクトを発表。基本的には同じ5つの主要プロジェクトであるが、ACRPはより行動志向に重点を置いて実施していくことになる述べた。



また、WCRP/RfP日本委員会理事長の植松誠師（日本聖公会主教）は、大会ホスト委員会として同日本委員会よりフラッグシップ・プロジェクトの実施に向けて、3,000万円（約273,000米ドル）をACRPに拠出することを正式に発表した。ACRP実務議長のディン・シャムスディーン博士は、「WCRP/RfP日本委員会からの寛大な支援を喜んで受け入れ、この財的支援とアジアの平和を追求するACRPのコミットメントを通じて、ACRPは必ずや「ありがとうから行動へ」の道を進んでいこう」と締めくくった。

新型コロナウイルスパンデミックにおける宗教コミュニティの役割

私たちは新型コロナウイルスのパンデミック時代にどう立ち向かい、対応していくのか。個人やコミュニティへの新型コロナウイルスの影響を緩和するために、宗教指導者はどのような役割を果たせるのか。WCRP/RfPオーストラリア事務総長の**デスモンド・カーヒル教授**が議長を務める全体会議IIIでは、新型コロナウイルスの影響に対処する最優良事例に焦点をあてた。

基調講演者の参議院議員、WHOユニバーサルヘルスカバレッジ担当親善大使の**武見敬三氏**は、新型コロナウイルスのパンデミックによる国家的・世界的なリスクに対処するためのアプローチとして、人間の安全保障を構築するための国際的な対策を呼びかけた。パンデミックには国境がないため、複数レベルでの協力と関与が必要となる。つまり、パンデミックへのアプローチは、すべての人が果たすべき役割を持ち、誰も取り残されることのないようにすべきであるという、効果的な普遍主義を提案した。

CCRP副会長であり中国イスラミック連盟会長の**イマーム・ヤン・ファミン師**は、「生きる権利は最大の人権である」と強調した。この原則に基づき、CCRPは中国内外で資材や医薬品の寄付を行うなど、新型コロナウイルスに対処するための多くのプログラムや活動を行ってきたことを報告した。CCRPは、勇気、責任、科学と技術を結集し、最終的にパンデミックの影響からの回復の道を切り開いてきた。

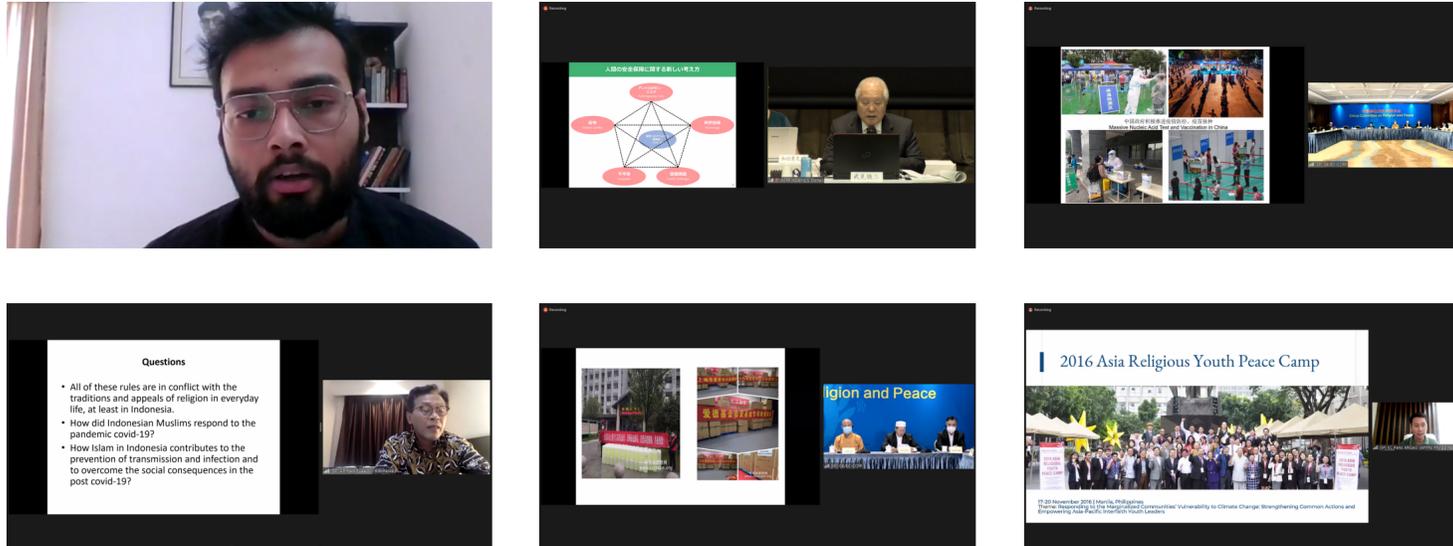
自身が新型コロナウイルスに感染したWCRP/RfPフィリピンの**カルロス・レイス神父**は、コロナ禍の宗教の主な役割は、傷ついた世界に奉仕することだと考えている。レイス神父は、「私たちの最も緊急の懸念はパンデミックの抑制である。この懸念は、国や宗教、文化の境界を越えて広がらなければならない。なぜならウイルスは区別しない。ウイルスにとって国境など関係ない。私たちの慈善活動もそれと同様に、国境を越えていかなければならない。私たちは皆、同じ船に乗っており、全員が安全でなければ、誰一人安全ではないのだから」と訴えた。



立教大学総長で聖公会主教の**西原廉太博士**は、植松主教夫妻が老人ホームに入居する老女との日曜礼拝のために稚内へ出かけた際の話語り、新型コロナウイルスの影響に立ち向かう最も重要な方法として、祈りや典礼儀式の意義を示した。植松主教によれば、「オンライン時代に生きているからこそ、私たち宗教者はこの本質に立ち返る必要がある」という。

ジャカルタのインドネシア大学アブデュラマン・ワヒド諸宗教対話と平和センター事務局長の**アフマド・スアディ博士**は、インドネシアのイスラーム社会での研究と経験を挙げ、今回のパンデミックにおいて、宗教的権威が社会への奉仕に大きな役割を果たしていると述べた。草の根レベルで基盤を持つ宗教指導者の関与は、「コロナ禍における健康への手順を遵守するという信者の義務の正当性を強化し、感染率や死亡率の低下に成功し、癒しや福祉の向上を促している」と述べた。

WCRP/RfPフィリピン副事務総長の**ハイディ・ファジャルド師**は、新型コロナウイルスの問題として、人間の健康、国家経済、ジェンダー不平等、また国連が定めるSDGsなど全般的に論じた。アジア太平洋女性信仰者ネットワーク（APWoFN）のメンバーとして、世界的なパンデミックによって引き起こされた課題に男性や女性が行動を起こし、解決策を提供するのを目の当りにしてきたことを受けて、「宗教者やWCRP/RfPのような信仰を基盤とする組織は、紛れもなく世界の諸課題を解決する一翼を担っている」と述べた。



青年は未来であるだけでなく、「現在」でもあると考える、APIYN事務総長のシャミール・リシャド師は、新型コロナウイルス禍においてインドの青年が直面したさまざまな課題を紹介した。そして青年達に、平和構築への取り組みを継続し、対話や諸宗教の友好関係を築くことで、自国の未来のリーダーとなる可能性を身につけるよう呼びかけた。

アフガニスタンに関するセッション

ACRP事務総長の根本信博博士とKCRPのアン・ヒョンミ博士が議長を務めたアフガニスタンに関するセッションでは、同国の厳しい状況におけるACRPの役割について、全体での議論を行った。

アフガニスタンにおける人道支援活動について、現地NGO「Your Voice Organization」プロジェクト・ディレクターであるサビルラ・メムラワル氏、日本のNGO「平和村ユナイテッド」代表の小野山亮氏、「JEN」アフガニスタン事務所所長のハミドゥラ・ハミッド氏、「JEN」アフガニスタン/トルコプロジェクト・プログラムオフィサーの松浦晃子氏、日本のNGO「シャンティ国際ボランティア会」事務局長兼アフガニスタン事務所所長の山本英里氏、そしてACRPのECメンバーであるWCRP/RfPパキスタンのムハマド・ハニフ・カーン師より報告があった。

議論の中で、危険で暴力の発生しやすい環境にありながらも、人々に非暴力と対話を教育するアフガニスタンの市民リーダー達の勇気に、多くの指導者たちが共感と感謝の意を表した。最後に、ACRPはパートナーと協力して平和構築活動を行い、アフガニスタンと近隣諸国との対話を促進し、アフガニスタンの人々、とりわけ最も弱い立場にある人々への支援を意識的に取り組んでいくことを再確認し、セッションを締めくくった。

